

ドラムサークルの活動が社会情動的スキルへ与える影響について

— 小学校音楽授業の実践から —

学 籍 番 号 2 4 9 2 1 2

氏 名 土井 紀美子

主指導教員 高 橋 登

副指導教員 柿 慶 子

1. 研究背景・問題意識

義務教育課程において、音楽を学ぶことの意義に疑問を抱く児童は少なくないと指摘されている。小学校音楽科では、合唱や合奏など、複数の児童が相互に音を聴き合いながら一つの音楽を形成する学習活動が多く位置づけられているが、これらの活動が肯定的に受け止められるかどうかは、学級内の人間関係や学習環境における心理的な安心感に大きく左右される。こうした点を踏まえ、音楽科における学習活動が、児童相互の関係性の形成や情動的側面にどのような影響を及ぼし得るのかを明らかにしたいと考えたことが、本研究の出発点である。その際、以前より実践していたドラムサークルの活動に焦点を当てて研究を進めた。

2. 研究目的・課題

本研究の目的は、小学校音楽授業におけるドラムサークルの実践が、児童の社会情動的スキルにどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることである。ドラムサークルに着目した背景として、著者自身が当該活動を体験する中で高い充実感を得たことに加え、児童を対象とした試行的実践において、「面白い」「楽しい」「また取り組みたい」といった肯定的な反応が多く確認されたことが挙げられる。これまで経験的に把握されてきたドラムサークルの教育的意義について、社会情動的スキルの視点から量的および質的に検討することを通して、音楽教育における新たな可能性を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

2025年5月から11月にかけて、実習校に在籍する4年生（93名）、5年生（91名）、6年生（115名）の児童を対象に、音楽授業の導入として約10分間ドラムサークルの実践を行った。4年生から6年生の音楽授業はいずれも音楽専科教員が担当しており、本実践は著者である音楽専科教員によって実施された。その後、質問紙調査による統計的分析と、授業観察に基づくフィールドノーツの記述をもととした児童の行為を分類・解釈する質的分析を行い、統合的に検証することを試みた。

4. 結果

量的手法の質問紙調査においては、2025年5月・7月・12月の3時点で実施した。分散分析の結果、自己肯定的適応力では調査時期による主効果が認められ、5月から7月・12月にかけて得点の変化が見られたが、学年差および交互作用はいずれの尺度においても有意ではなかった。共感的社会性、自己抑制、目標への情熱の各尺度においては、学年差・時期差ともに有意な変化は認められなかった。これらの結果は、ドラムサークルの実践による社会情動的スキルの変化が、量的指標としては明確に捉えられにくいことを示唆している。

質的手法のフィールドノーツの分析においては、ドラムサークルの実践において、児童の参加の様相や関係性において質的な変容が確認された。活動初期には緊張感や抵抗感、不安感が表出しやすかったが、回を重ねるにつれて、周囲の音や他者の行為を手がかりに自己調整を行いながら参加するようになっていく。特に、自由即興による全体演奏は参加への心理的ハードルが低く、この活動を毎回入れることが、他の活動の取り組みやすさに繋がることも実感した。

行為の様相に着目すると、①音への応答的行為、②他者を意識した相互行為、③情動の表出を伴う参与行為という三つの側面が抽出された。これらの行為は、単なる音楽的技能の発揮ではなく、他者との関係の中で行為を調整し、安心して自己を表出しようとする社会情動的スキルが、活動場面において生成・可視化された局面であると解釈できる。すなわち、社会情動的スキルは個人内の固定的特性としてではなく、音楽的相互作用の中で遂行される関係的实践として立ち現れていたことが示唆された。

質問紙調査では各尺度において有意な変化は認められなかったが、一方でフィールドノーツに基づく質的分析からは、即興的な音楽活動を通して、児童が他者との関係の中で自己調整、情動を伴って参加する行為の生成が確認された。これらの結果から、社会情動的スキルは個人内の固定的特性として量的に把握されるものに限られず、活動場面における関係的・遂行的実践として可視化される可能性が示唆された。

5. 考察・結論

本研究は、音楽授業における実践を通して、社会情動的スキルと学習の関係を捉え直す一つの視座を提示している。ドラムサークルは、発達の最近接領域（ZPD）において、他者や音環境を媒介としながら児童の情動的参与を可能にする学習環境として機能していたと考えられる。音楽科の教育的意義は、社会情動的スキルを直接「教える」場にあるのではない。協働的な音楽実践の中でそれらが生成され、可視化される場として再び位置づけられてくる。本実践の教育的意義は、数値の変化としての効果ではなく、ZPDの中で児童のパフォーマンスがどのように立ち上がり、変容していくのかを具体的に示した点にある。

ただし、結果の一般化には慎重な検討が必要である。今後は、実践校や実施者を拡大した研究や、教師研修等を通じた実践の検証を行うことで、ドラムサークルの教育的意義をより多角的に明らかにしていくことを視野に入れたい。学校全体の教育活動の中で、社会情動的スキルを育む音楽的实践をどのように位置づけていくかが課題となる。児童同士の関係形成に加え、教師間の協働やチームビルディングの視点からも、音楽がもつ教育的可能性を引き続き検討していきたい。